



# 専務のコラム



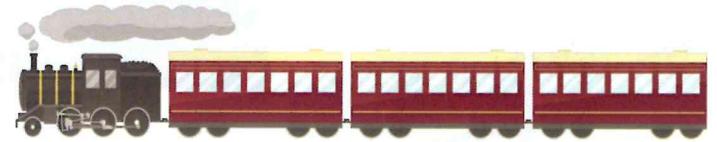
私が生まれ育った松野町は高知県境に位置し、奈良山霊苑のある鬼北町を含め高知県西土佐までの地域を伊予の「予」と土佐の「土」を取って予土地域と呼んでいる。その昔は武士同士の勢力争いが絶えない混沌とした地域だったが、同時に商業や文化の交流が盛んにおこなわれた地域でもあった。

南予の中心宇和島市から県をまたいで西土佐江川崎まで走る路線を「予土線」と呼び、交通事情の悪かった時代の「足」となり多くの人々を運んできた。

とりわけ松野町には高校がなく、中学を卒業すると必然的に予土線に乗って高校に通うことになるのである。



父の学生時代には蒸気機関車が走っていたらしく、聞いたところによると忘れ物を思い出して飛び降りても追いかけて飛び乗ることが出来たくらい遅かったそうで、上りの急な坂道になると進まなくなるので力自慢の学生たちが後ろから押していたとか。



私が高校生の頃は4人掛けのボックス席で、乗り込むと朝寝の続きとばかりによだれを垂らして寝ているか、昨日やるはずだった宿題をやっているか、友人ととにかく中身のない話をしているか、汽車通学の学生にとって宇和島駅に着くまでの1時間は貴重な時間でもあった。

部活動でクタクタに疲れて乗り込む帰りの便ではよく寝過ぎて、気が付いたら高知県だったということも度々あり、飛び降りたら真っ暗な無人駅で、灯りを頼りに民家を訪ねて電話を借りたこともあった。

(しかも度々だったので「またこいつかっ」という顔をされる)

就職試験の帰りの便では、乗り合わせた友人に面接の様子を面白おかしく話して笑い転げていたら、高知支店の面接に向かっていたその面接官が斜め後ろでニヤニヤ笑いながら座っていて固まった事や、鬼北町の内深田駅には「ここに牛をつなぐな」と書かれた看板がありビックリした事など、予土線にまつわる思い出はたくさんある。



その予土線が現在、四国で一番の赤字路線となり存続の危機をむかえている。過疎による少子化や自家用車での通勤や送り迎えをする保護者が増えたことにより利用者が激減してしまった事が要因である。「日本一遅い新幹線」、「ホビートレイン」、「トロッコ列車」など様々な工夫をして利用客を呼び込んでいるが、交通手段がほぼ自家用車である住民が、本数が少ない予土線を利用することはあまりなくなってしまった。

春には務田駅から北宇和島駅間で観ることが出来る満開の桜並木や、高知県へ向かう途中から四万十川に沿って走る(めちゃ遅いけど)絶景をもっともっとたくさんの人に観て欲しいし、なんなら乗り過ごしたっていいじゃないか。

とかく時間に追われあくせく働く我々現代人、たまにはのんびりと景色を眺めながら贅沢な時間を味わってみるのも悪くない。

